

研究授業
(1)学部 対象年齢:
活動名:

幼稚部 3歳児クラス 「あきの たべものをつくろう」

研究協議の
ポイント

制作活動を年間を通して計画的に保育に取り入れることにより、巧緻性の発達や道具を使う経験を重ねてきたことなどについて授業者から説明があった後、3歳という発達段階と、巧緻性や特性を踏まえて主体性をどう育むのかということとを協議しました。多くの教員から担当年齢に合ったたくさんのアイデアが出されました。

研究授業
(2)学部 対象年齢:
活動名:

幼稚部 5歳児クラス 「みんなで大きな絵を描こう」

研究協議の
ポイント

友だちと思ったことを伝え合いながら、一つの大きな絵を完成させるという試みでした。まずは描きたい動物を遠足の動物園見学から想起させる等、行事と保育をうまくつなげた取組みとなり、行事を中心として、いつ・どのような保育をしていくのかというカリキュラムの再構築についての議論が行われました。

成果

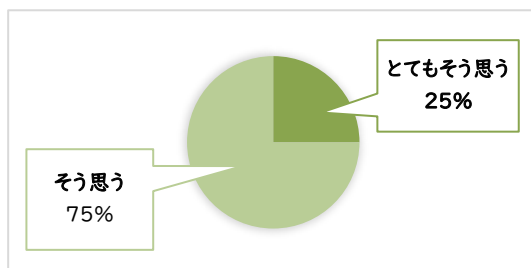
3歳児4歳児5歳児においてクラスで制作活動を通して研究保育を行いました。「主体的に遊ぶ力を育む保育の実践と、評価の方法の改善に向けた取組み」というテーマに基づき、幼児一人ひとりが主体性を持って活動に参加するための支援について考えました。支援の方法については全体会で保育指導案を見ながらグループでアイデアを出し合いました。

また、主体的に遊ぶ力を育むためには、幼児自身が見通しを持って活動できる保育を設定することが大切であることから、幼児が次の活動を予想できるように、それぞれの保育の連続性を意識した保育計画を立てました。例えば3歳児クラスでは季節を感じることで制作活動を関連付けることで「四季のたべものをつくろう」という保育を設定しました。今回の研究保育は秋の食べ物をテーマに制作活動を行いました。春、夏と同様の活動を行ってきたことで、子どもたちは安心して活動に取り組むことができていました。また、4歳児5歳児クラスでは行事と制作活動を関連付けて校外学習の動物園見学の体験を基にした制作活動を考えました。実際に動物を見た体験を制作でのびのびと表現する活動となりました。

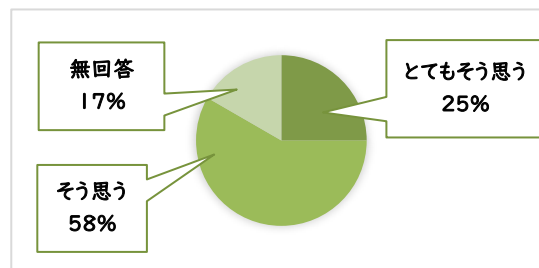
そして、保育の評価についても、学びを深めました。保育を通して予想される幼児の姿を想像し、保育計画を立てていくことで、どの場面でどのような子どもの様子を見とるのかという評価規準を具体的に記述することができました。

アンケート
結果

① 学校のニーズにできていた



② 今回の成果を継続的に生かしていく



(感想より)

- ・ 今回の研修を受けることで学部の課題も見えてきた。教員が学部一体となって授業力向上に向かうことができたのは大変良かったと思う。
- ・ 幼稚部としての研修だったが、研修での学びを全校で共通理解していきたい。
- ・ 支援の視点や細かな配慮などに気付くことができた。
- ・ パッケージ研修を通して一人ひとりが保育や子どもについて考える機会となり、指導案作成の重要性の理解につながった。
- ・ 他のクラスの保育を見ることで「自分だったらこうしてみたい」「今度この保育の方法を取り入れてみたい」など考えるようになった。
- ・ 「教える」スタイルの保育になりがちなので、幼児期の自然な育ちをどのように大切にしていくかという課題に気付いた。
- ・ 部内の意見だけだと偏りが出てきてしまうので、部外からの率直な意見を聞かせていただくことができて良かった。
- ・ 幼稚部に合わせた指導案のスタイルを考えたい。